

平成13年度病虫害発生予報 第2号（5月予報）

平成13年4月27日
青 森 県

【概要】

水 稲：苗立枯病（もみ枯細菌病、苗立枯細菌病）は平年並、イネドロオイムシ等の初期害虫は平年並～やや少ないと予想される。

りんご：各病虫害とも、樹生態がやや早く経過しているため、発生時期は全体的にやや早いと予想される。

リンゴハダニが南部地域でやや多く、その他の病虫害は概ね平年並と予想される。

特産果樹：各病虫害とも、樹生態がやや早く経過しているため、発生時期は全体的にやや早いと予想される。

おうとうの灰星病がやや多いと予想される。

畑 作：小麦のうどんこ病、赤さび病が全県的にやや多いと予想される。

野 菜：にんにくのさび病がやや多いと予想される。

1 予報内容

(1) 水 稲

病虫害名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
苗立枯病 (ヒシム・フザリウム)	県内全域	-	平年並	5月の気温が平年並の見込みである。 防除が徹底されている。
苗立枯病 (ごま葉枯病)	県内全域	-	平年並	前年の収穫期における発生量が平年並であった。 5月の気温が平年並の見込みである。
苗立枯病 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	県内全域	-	平年並	前年の収穫期には、もみ枯細菌病の発生は平年同様認められなかった。 5月の気温が平年並の見込みである。
ばか苗病 (育苗期)	県内全域	-	平年並	前年の本田における発生量が平年並に少なかった。 種子消毒が徹底されている。
イネミズゾウムシ	津軽地域	(食害始め) 平年並	やや少ない	5月の気温が平年並の見込みである。 前年の発生量が、津軽地域はやや少なく、南部地域は平年並であった。
	南部地域		平年並	
イネドロオイムシ	県内全域	(成虫初発期) 平年並	やや少ない	5月の気温が平年並の見込みである。 前年の発生量がやや少なく、越冬成虫数もやや少ないと考えられる。

(2) りんご

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病	県内全域	やや早い	平年並	前年の実腐れの発生量が平年並であった。 樹生態が平年よりやや早かった。
腐らん病 (枝腐らん)	津軽地域	-	平年並	4月の発生量が平年並であった。
	南部地域		やや少ない	4月の発生量がやや少なかった。
黒星病	県内全域	やや早い	平年並	樹生態が平年よりやや早かった。 5月の気温、降水量が平年並の見込みである。
ミダレカクモンハマキ	県内全域	やや早い	平年並	樹生態が平年よりやや早かった。 越冬卵量はやや少なかった。
リンゴハダニ	津軽地域	やや早い	平年並	樹生態が平年よりやや早かった。 越冬卵量が平年並である。
	南部地域		やや多い	樹生態が平年よりやや早かった。 越冬卵量がやや多かった。
クワコナカイガラムシ	県内全域	やや早い	平年並	樹生態が平年よりやや早かった。 5月の気温が平年並の見込みである。 越冬卵量がやや少なかった。

* その他の病害虫：赤星病、うどんこ病は平年並に少ない見込みである。

(3) 特産果樹

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(ぶどう) 灰色かび病	県内全域	やや早い	平年並	樹生態が平年よりやや早かった。 5月の降水量が平年並の見込みである。
(な し) 黒星病	県内全域	やや早い	平年並	樹生態が平年よりやや早かった。 5月の降水量が平年並の見込みである。
(おうとう) 灰星病 (花腐れ)	県内全域	早 い	やや多い	樹生態が平年より早かった。 前年の実腐れの発生量が多く、越冬菌量が多いと見込まれる。 5月の降水量が平年並の見込みである。

(4) 畑作・野菜

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(小 麦) うどんこ病	県内全域	-	やや多い	初発が全般的に早めとなっている。 5月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(小 麦) 赤さび病	県内全域	-	やや多い	4月上～中旬の気温が高めに経過した。 5月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(小 麦) 赤かび病	県内全域	-	平年並	5月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(にんにく) 春腐病	県内全域	-	平年並	5月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(にんにく) さび病	県内全域	早 い	やや多い	4月上～中旬の気温が高めに経過した。 5月の気温、降水量が平年並の見込みである。

2 防除のポイント

< 水稻 >

《5月の防除作業》

1 半 旬	2 半 旬	3 半 旬	4 半 旬	5 半 旬	6 半 旬
育苗後期		田 植 期		/ 本田初期	

- | | | | |
|----------|---|--|---------------------------|
| ・防除時期 | | | |
| ・防除対象病害虫 | イモミズウシ
イトヨロシ
イモガハエ
いもち病
(育苗箱施用)
(側条施用) | | イモミズウシ
イトヨロシ
(水面施用) |

注： 印は前年までの発生状況により防除する。
印は5月末の発生状況により防除する。
印は抵抗性の弱い品種や常発地で防除する。

【 苗立枯病 】

苗立枯病は苗が徒長軟弱なときに発生しやすいので、適正な管理に努める。健苗を育てるためには生育段階ごとの適温があり、緑化から1.5葉期までは30℃以上にならないように、1.5～3葉期では25℃以上にならないように、換気に努めるとともに、灌水もできるだけひかえる。

(フザリウム、ピシウム)

育苗中に極端な低温に遭遇すると苗の抵抗力が弱まるため、フザリウム菌、ピシウム菌による苗立枯病が発生しやすくなる。保温資材などを準備し極端な低温に備える。

（苗立枯細菌病、もみ枯細菌病）

育苗中の高温、過湿により発病が助長されるので、換気に努めるとともに、灌水もできるだけひかえる。

発病苗は植えない。

（ごま葉枯病）

高温・過湿は発病を助長するので、十分注意する。

苗の発病程度が高まるほど移植後の生育が劣るので、発病のひどい苗は移植しない。

【 ばか苗病 】

田植前にり病苗（徒長苗、わい小苗など）を抜き取り、本田に持ち込まない。

【 いもち病 】

いもち病抵抗性の弱い品種（ゆめあかりなど）や常発地などでは、デラウス粒剤、Dr.オリゼ箱粒剤、ウィン箱粒剤、バイオン粒剤2のいずれかを箱当たり50g、またはそれらの混合剤を苗の上から均一に散布する。あるいは、側条オリゼメート顆粒水和剤500g（10a当たり）を同重量の水に混ぜてから、ペースト肥料に均一になるように混和し、側条施肥田植機で苗の移植と同時に施用する。

【 イネミズゾウムシ 】

防除の基本は、田植後に発生程度に応じて行うことであるが、例年発生の多い水田や他害虫が発生して同時防除を必要とする場合には薬剤の育苗箱施用を実施する。

側条施肥田植機で肥料施用時に防除する方法もある。

箱施用を実施しなかった水田で5月6半旬に食害株率で6割を越えた場合は、農薬の水面施用により防除する。農薬等については県農作物病虫害防除等基準を参照する。

食害株率の調査は、次のように行う。畦畔から中央に向かって、2mぐらい入った地点から、中央に向かって連続50株調査する。1筆当たりの調査ヶ所数は2ヶ所以上とする。

【 イネドロオイムシ 】

本年の発生はやや少ない見込みであり、イネミズゾウムシ等と同時防除するようにする。

P H C（サンサイド）剤、P M P（アッパ）剤抵抗性の発現が認められる地域もあるので、防除効果が低下していると思われる場合には防除剤を替える。

【 その他の病虫害 】

イネハモグリバエ、イネヒメハモグリバエとも全般には発生が少ない見込みであるが、例年発生の多い地帯では、本田発生初期に県農作物病虫害防除等基準に準じてイネドロオイムシなどと同時防除する。

防除上注意すべき事項

粒剤を育苗箱に施用し移植すると、巻葉や葉先枯れなどが発生したり、一時的に初期生育が抑制されることがあるので、使用上の留意事項を厳守する。

粒剤の水面施用は、湛水状態で行い、散布後4～5日間は水を流さない。

<りんご>

【 モニリア病 】

葉腐れ、実腐れは見つけ次第摘み取って処分する。

葉腐れの多い園地及びその周辺では、開花直前にアンピルフロアブルを選択するか、それ以外のE B I単剤にトップジンM水和剤を加用して散布する。

【 黒星病 】

開花直前と落花直後の散布は防除上最も重要な時期であるから、できるだけ間隔をあけないで基準散布量を守り、防除薬剤を散布する。

【 腐らん病 】

胴腐らんは泥巻きをするか削り取って塗布剤を塗る。

トップジンMオイルペーストを使用して再発した場合は、削り取って他の塗布剤を塗るか、泥巻きを行う。

【 ミダレカクモンハマキ 】

発生の多い園地では、開花直前及び落花直後にアタブロンSC、カスケード乳剤、ロムダンフロアブルのいずれかを選択し、同一薬剤を連続して散布する。

落花10日後頃に発生が多い場合は、ダーズバン水和剤、トクチオン水和剤、エルサン水和剤のいずれかを特別散布する。

【 リンゴハダニ 】

開花期に発生が目立った園地では、落花直後に殺ダニ剤を加用する。ただし、コロマイト乳剤はマメコバチに悪影響があり、薬害の懸念があるのでこの時期に使用しない。

また、オマイト水和剤は薬害のおそれがあるので7月末までの使用を避ける。

【 クワコナカイガラムシ 】

落花15日後頃に防除剤を散布する。ただし、発生が多い場合は、落花10日後頃、落花20日後頃に防除剤による胴木洗いを手散布で実施する。

< 特産果樹 >

ぶどう

【 灰色かび病 】

新梢の摘心や誘引を適切に行い園地内の通風をよくする。ハウス栽培では室内の換気に努め、過湿にならないように注意する。

新梢伸長期（新梢約20cm）にユーパレン水和剤またはポリオキシシンAL水和剤を散布する。またスチューベンなどで黒とう病の発生が多いところではジマンダイセン水和剤を選択する。

なし

【 黒星病 】

落花直後は、ビスダイセン水和剤またはキャプタン剤、落花10日後は、キャプタン剤またはEBI剤を散布する。

天候が不順で黒星病の多発が懸念される場合は開花直前と落花10日後にEBI剤を選択する。西洋なし（フレミッシュ・ビューティー）の場合は、落花10日後にジマンダイセン水和剤をEBI剤に加用散布する。

おうとう

【 灰星病 】

落花直後（満開5日後）にバイコラル水和剤を散布するか、キャプタン剤にトップジンM水和剤を加用して散布する。なお、雨の多い場合は晴れ間を選んで散布する。

トップジンM水和剤の耐性菌が高率に出現している地域では落花直後（満開5日後）にバイコラル水和剤を選択する。

落花1週間後に、キャプタン剤を散布する。

< 畑作・野菜 >

小麦

【 うどんこ病、赤さび病、赤かび病 】

うどんこ病、赤さび病の防除は発生初期と7～10日後の2回位、下葉にも十分付着するように散布する。

赤かび病は、出穂期以降に降雨や濃霧が続く場合、出穂期～乳熟期の防除を徹底する。特に、発生源となる紅色雪腐病の発生が見られるほ場では注意する。

ネバリゴシは、うどんこ病に弱いので注意する。

トップジンM水和剤、同粉剤及びスミトップM水和剤、同粉剤は、耐性菌が出やすいので連用しない。

石灰硫黄合剤はムギダニを同時防除できる。

にんにく

【 春腐病 】

降雨が続くような場合に発生しやすいので、雨上がり後の予防的な防除を徹底する。

有機物や肥料が過剰投入されたほ場では多発生する傾向がある。

腐敗株は伝染源となるので抜き取り処分する。

【 さび病 】

気温が20 前後と高めに推移すると胞子の飛散量が増加し、蔓延しやすくなる。

発病初期（下表の注を参照）が5月上旬～中旬となるようなほ場では、多発する傾向がある。特に、本年の発生時期は早いと見込まれるので、ほ場を良く見回り、初発の確認に努める。

下表の防除薬剤の散布時期と効果持続期間（散布間隔）を参考にして効率的に防除を実施する。なお、多発生が予想される場合には、下表の基準より散布間隔を短くする。

《 各種ニンニクさび病防除薬剤の散布時期別の効果持続期間 》

薬 剤 名	初発時期	蔓 延 期
アミスター20フロアブル	4 週間程度	21日程度
ラリー乳剤	4 週間程度	10～14日程度
ストロビーフロアブル	4 週間程度	10日程度
バイレトン乳剤	4 週間程度	7～10日程度
バイレトン水和剤 5	4 週間程度	7 日程度

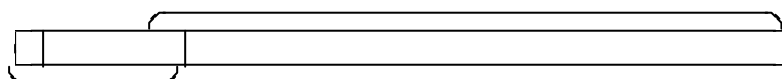
注）初発時期：越冬後に発病が開始する時期（発病初期のうちでも、ごく初期）。

発病初期：主に発病株率が増加する時期（被害程度は軽微であるが、株間での広がりが見られる。徐々に蔓延期に移る）。

蔓 延 期：主に発病度が増加する時期（株内での被害程度が増加する）。

初発時期

蔓 延 期



発病初期

5月の病害虫テレホン情報案内

青森県農業試験場病害虫防除室（津 軽 地 域） 電 話 0 1 7 2（ 5 3 ） 0 0 3 3

月	旬	水 稻	り ん ご	畑作・野菜
5	上	育苗後期の苗立枯病防除	黒星病とミダレカクモン ハマキの防除	にんにくの春腐病防除
	中	殺虫剤の育苗箱施用		
	下	イネミズゾウムシの防除	黒星病の防除	

青森県畑作試験場病害虫防除室（南 部 地 域） 都合により一時休止します。

なお、テレホン情報は、病害虫の発生状況により変更することがあります。

病害虫に関する問合せ先

	電話	F a x
青森県農業試験場病害虫防除室	0172(52)9500	0172(53)3717
青森県畑作園芸試験場病害虫防除室	0176(53)7171	0176(53)8934
青森県りんご試験場病虫肥料部	0172(53)6132	0172(52)5934
青森県りんご試験場県南果樹研究センター	0178(62)4111	0178(62)4114
青森県フラワーセンター21あおもり生産技術部	017(728)8721	017(728)8727